【4】原始仏教聖典資料と釈尊伝再構築の試み

［1］本研究は上記のような障害を乗り越えて、原始仏教聖典を資料として「釈尊伝」と「釈尊教団形成史」を再構築してみようというものであるから、「仏伝経典」や「現代の仏伝研究」の目指すものとは方法論においてもおのずから異なる。

そこで本節では本研究の採用しようとしている基本的な方法論を説明する。

［1－1］我々が行わなければならない基本的な作業には２つある。１つは「一時」で処理されている大多数の原始仏教聖典資料をまず年次が古いものから新しいものへと時系列にしたがって並べ替える作業であり、２つ目はそれらの年代を特定する作業である。

［1－2］原始仏教聖典資料は「日付」の部分が失われた釈尊の（説話的潤色の施された）言行録に関する「備忘録」ということができる。それを「日付」が付されていない写真の山に喩えることができよう。

例えばここに１枚の写真があるとしよう。この写真には大きな寺院を背景にして釈尊を中心に、両隣りに３人の比丘が写っている。いつも若々しい釈尊の年齢をこの写真から知ることは難しい。しかしこの大きな寺院が祇園精舎で、釈尊の隣に控えめに写っている若い僧が阿難であることは知ることができる。

もしこれだけの情報をこの写真から知りうるとすれば、この写真は祇園精舎が建設された以降のことであることはいうまでもない。我々は現時点で祇園精舎が釈尊成道何年目に作られたという結論をもっていないが、例えば前節の「仏伝経典」の情報を採用するとすると、多くは釈迦族の教化の後とするから、少なくとも成道６年以降ということになる。しかし後世の資料では舎衞城における最初の雨安居は成道１４年とするから、これに基づくなら１４年以降となる。

また阿難は“Theragāthā”や『侍者経』、各種「涅槃経」などによれば釈尊の晩年２５年間を侍者として過ごしたとするから(1)、釈尊の成道２０年目に侍者となったことになる(2)。したがってこの写真はさらに成道２０年以降と限定することができる。

今の時点で阿難以外の比丘２人が誰であるかを我々は知らない。だからこれを比丘A、Bとしておこう。しかし他の１万数千枚の写真の中には彼らが写っている可能性は大いにありうる。そこで他の写真を検索してみると彼らが写っている数枚の写真が見つかった。その中の１枚は比丘Aの葬式の写真で、ここにも釈尊が写っている。とするならば祇園精舎の写真はこの写真よりも前のことで、もちろん比丘Aは釈尊よりも前に亡くなったことが知られる。

また別の写真には比丘Bが在俗信者の姿で写っている。そしてここには釈尊とともに阿難の姿も写っている。とするならばこの写真は先の祇園精舎の写真よりも前のもので、比丘Bは阿難よりも後輩であることが分かる。阿難は釈尊の成道２０年目、すなわち５５歳の時に出家して侍者となったのであるから、比丘Bの出家はそれ以降のことであり、祇園精舎の写真は更にその後で、比丘Aの死亡以前ということになる。

このように文字情報の無い１枚の写真にさえたくさんの情報が盛り込まれているのであって、これが文書で書かれた「備忘録」となればもっと豊富な判断材料を提供してくれる。例えば比丘Aはどこの出身で、３人兄弟の末弟で、兄２人の名前は甲、乙で比丘Bよりも前に出家した。そして比丘Aは悟りが開けないのを苦にして自殺したといった、写真には盛り込め

ない情報も盛り込みうるからである。

我々の基本的な方法論は、こうした網の目のように関連しあった１つ１つの原始聖典に盛り込まれた情報を読み取って、それを時系列にしたがって順番に並べるとともに、それらがいつ（釈尊の成道何年）のことであったかを特定しようとするのである。

（1）“Theragāthā”v.1039～43、中阿含経３３『侍者経』、長阿含経２『遊行経』、白法祖訳『仏般泥洹経』、“Mahāparinirvāṇasūtra ”、“Jātaka”456。失訳『般泥洹経』は２０余年とする。

（2）【論文３】で論じるように、釈尊は２月１５日に入滅された。この日から起算して満２５年は入胎から起算する満年齢で５５歳のとき、成道から起算するとちょうど満２１年目の当日に相当する。阿難がちょうど満２５年間ではなく、満２５年間余を侍者として過ごしたとすると、成道２０年中に侍者になったということになる。しかしこの２５年間は、このような厳密な計算ではなく、むしろ単純に釈尊４５年間のうちの２５年間を侍者として過ごしたのであるから、阿難が侍者になったのは成道２０年というように、単純に考えたほうがよいかもしれない。

［2］以上のように１つの経典には数多くの情報が盛り込まれているのであるが、その情報を大きく分けると次の３種となる。

(1) 釈尊の生涯の特定の時点であることを直接的に示すもの

(2) それ自体では特定の時点を示さないないが、研究が進めばそれが釈尊の生涯のどの時点のものであるかが分かってくることが期待されるもの。すなわち間接的に示すもの

(3) 特定の時点は示さないが、順序の前後を示すもの

である。

以下これらについて詳しく述べることとする。